

あい ふ し ぎ
愛は不思議なもの

せいかつ さべつ いくまん にんげん す とかい
生活に差別のあるのは、ひとり、幾万の人間の住んでいる都会ばかりで
ありません。いなか おな むら へいわ むら
ありません。田舎においても同じであります。その村は、平和な村であり
ましたけれど、す ひとびと こうふく み うえ
そこに住んでいる人々は、みんな幸福な身の上というわけ
ではありませんでした。

ちい じぶん ちちはは し わか おぼ うち そだ
おしずは、小さい時分に、父母に死に別れて、叔母の家で育てられた
みなしご じゅうしち はち むら うち ほうこう
孤児でありました。そして、十七、八のころ、村のある家に奉公したの
であります。うち ひと なさ ひとびと
であります。その家の人たちは、情けある人々でした。

ふたおや きょうだい
「おしずは、両親も、兄妹もないのだから、かわいがってやらなければな
らぬ。」と、ひと
いって、その人たちは、いたわってくれました。

かのじょ よっ ぼっ も うち しごと
彼女は、四つになる坊ちゃんの守りをしたり、家の仕事をてつだったり
まいにち はたら
して、毎日つつましやかに働いていました。

むら こだか はる なつ ようさん いそが
村は、小高いところにありました。春から、夏にかけて、養蚕に忙し
あき くだもの うつく たんぼ みの おお いけ
く、秋に、また、果物が美しく圃に実りました。大きな池があって、
いけ はやし あたた さむ
池のまわりは、しらかばの林でありました。暖かになるころから、寒く

なるところまで、いろいろのことり小鳥が、はやし林にきて、こえいい声でさえずっていまし
た。また、いけ池からは、むらむらふもとの村々の田へかけるた水がみず流れてながいました。

くすりう薬売りや、そのほかのぎょうしょうにん行商人が、むらたまたまこの村にやってきましたと、
むら「いい村だな。」とって、ほめました。

そのはずであります。うっそうと、あおば青葉のあいだしげった間から、しらかべ白壁のくら倉が
み見えたり、たの楽しそうにしょうじょ少女たちのうた歌うくわつみうた唄がき聞こえたりして、だれ
へいわでも平和な村だと思っただからであります。

おがわみめい
小川未明

https://www.aozora.gr.jp/cards/001475/files/52606_67750.html (青空文庫)